

北陸先端科学技術大学院大学
統合報告書2025

JAIST Integrated Report **BEYOND**

Building Excellence, Yielding Originality, and Nurturing Discovery

北陸先端科学技術大学院大学にご支援いただいている皆さまへ

北陸先端科学技術大学院大学（JAIST：Japan Advanced Institute of Science and Technology）は、独自のキャンパスと教育研究組織を持つ、日本で最初の国立大学院大学として1990年10月に創設されました。

創設の経緯としては、1987年の臨時教育審議会の第二次答申で具体化した先端科学技術大学院大学構想を基に、石川県が候補地として浮上し、辰口町（現能美市）に建設されることになりました。その背景には、当時の松崎従成辰口町長の強い熱意や、文部大臣を務められた地元選出の森喜朗元内閣総理大臣の大きな働きかけと共に、後に北陸経済連合会を通じて多額のご寄付をいただいた地元企業による力強いご支援がありました。

本学の創設にあたり、創設準備委員会がまとめた「北陸先端科学技術大学院大学の構想の概要について（最終まとめ）」では、「先端科学技術分野に係る高度の基礎研究を推進するとともに、大学等の研究者の養成のみならず、企業等において先端科学技術分野の研究開発等を担う高度の研究者、技術者等の組織的な養成及び再教育を行うこと」が創設の目的として述べられており、この精神は、2021年1月に策定した「JAIST未来ビジョン」にも継承されています。

近年の少子化の影響により、学部を持たない本学が優秀な学生を確保することが困難な中、2004年に国立大学が法人化されました。本学は最先端の研究を通じた人材育成と社会貢献を重視する方向性を打ち出し、国内外から集まった優秀な研究者による世界水準の研究を通じて9000人を超える有為な人材を育成し、研究と教育両面で社会に貢献してきました。

大学の在り方が問われる昨今、本学は大学院大学として、研究大学として、また地域活性化の中核として、その使命を果たすために新たな取り組みを行ってきました。2014年に

は、「北陸地域の活性化を目指した新産業創出と人材育成」をビジョンに掲げ、北陸発の産学官金連携マッチングイベント「Matching HUB Hokuriku」を開始しました。2016年には従前の3研究科から、既存の分野の枠を超えた9領域からなる1研究科へと改組しました。また、エビデンスに基づいた研究力分析を取り入れて、2022年4月に第4期中期目標・中期計画のスタートに合わせて新たに10研究領域へと再編しました。

新構想大学として誕生した本学は、常に時代の先端を走る使命を持ち、それにふさわしい変革と成熟を遂げていく必要があります。研究を通じた教育と社会貢献を基盤とした本学固有の大学文化を育みつつ、大学における無形の価値を顕在化し、未来への可能性について広く発信していきたいと考えています。

この「統合報告書2025」は、本学の取り組みについてわかりやすく紹介するとともに、大学運営に係る財務情報も掲載しています。本学の基本データを掲載した「大学概要」とともにご覧いただき、本学についてより深く知っていただく機会となれば幸いです。

本学は、自然豊かで、歴史と伝統、文化と芸術に優れた石川の地において、最先端の科学技術を究め、その成果により地域に貢献するとともに、日本、そして世界のステークホルダーの皆様との調和と共創、共存に努めていきます。

これまで本学の活動にご支援ご協力を賜った皆様に感謝し、本学に関わる全ての方々とのコミュニケーションを通じて、世界の持続的発展に貢献して参ります。

北陸先端科学技術大学院大学長

寺野 稔

CONTENTS

Overview

大学概要

- 3 JAIST の歩み
- 5 数字でみる JAIST
- 7 ビジョン



Performance

活動状況

- 11 研究
- 17 教育
- 23 社会貢献
- 27 経営
- 28 組織体制

Finance

財務状況

- 31 貸借対照表
- 32 損益計算書
- 33 主な財源の推移

Community

交流

- 35 基金、同窓会

北陸先端科学技術大学院大学 35年の歩み

北陸先端科学技術大学院大学は、1990年に、学部を置くことなく、独自のキャンパスと教育研究組織を持つ、我が国で最初の国立大学院大学として創設されました。開学以来、多くの技術者や研究者を社会に送り出し、研究活動や産学官との連携を通じて、さまざまな形で社会に貢献してきました。これからも、一人ひとりの挑戦を大切にしながら、時代とともに進化し、新たな価値を生み出していける大学をめざして歩み続けます。



1990 平成2年

- 北陸先端科学技術大学院大学開学
- 情報科学研究科設置

1991 平成3年

- 材料科学研究科設置
- 情報科学センター設置

1992 平成4年

- 新素材センター設置
- 第1回入学式挙行



1994 平成6年

- 保健管理センター設置

1995 平成7年

- JAIST Shuttle運行開始

1996 平成8年

- 知識科学研究科設置
- 附属図書館開館

2000 平成12年

- 開学10周年



2001 平成13年

- 遠隔教育研究センター設置

2002 平成14年

- ナノマテリアルテクノロジーセンター設置
(新素材センターを改組)
- ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー設置

2003 平成15年

- 東京サテライト設置

2004 平成16年

- 国立大学法人北陸先端科学技術大学院大学設立

2006 平成18年

- マテリアルサイエンス研究科設置
(材料科学研究科を名称変更)



2010 平成22年

- 開学20周年

2011 平成23年

- JAISTギャラリー設置



2016 平成28年

- 先端科学技術研究科設置
(知識科学研究科、情報科学研究科、マテリアルサイエンス研究科を統合)

2018 平成30年

- 融合科学共同専攻設置
- 化学物質等総合安全管理推進本部設置

2025
令和7年

2020 令和2年

- 開学30周年



2013 平成25年

JAISTイノベーションプラザ設置



2014 平成26年

- 産学連携本部設置

2022 令和4年

- 未来創造イノベーション推進本部設置
(産学官連携本部を改組)

2024 令和6年

- スタートアップ推進室設置



数字でみるJAIST

PEOPLE 学びと学生

学生数 

1,114人

2025年5月1日現在

教職員数 

296人

2025年5月1日現在

修了者数 

9,751人

2024年度末

就職率 

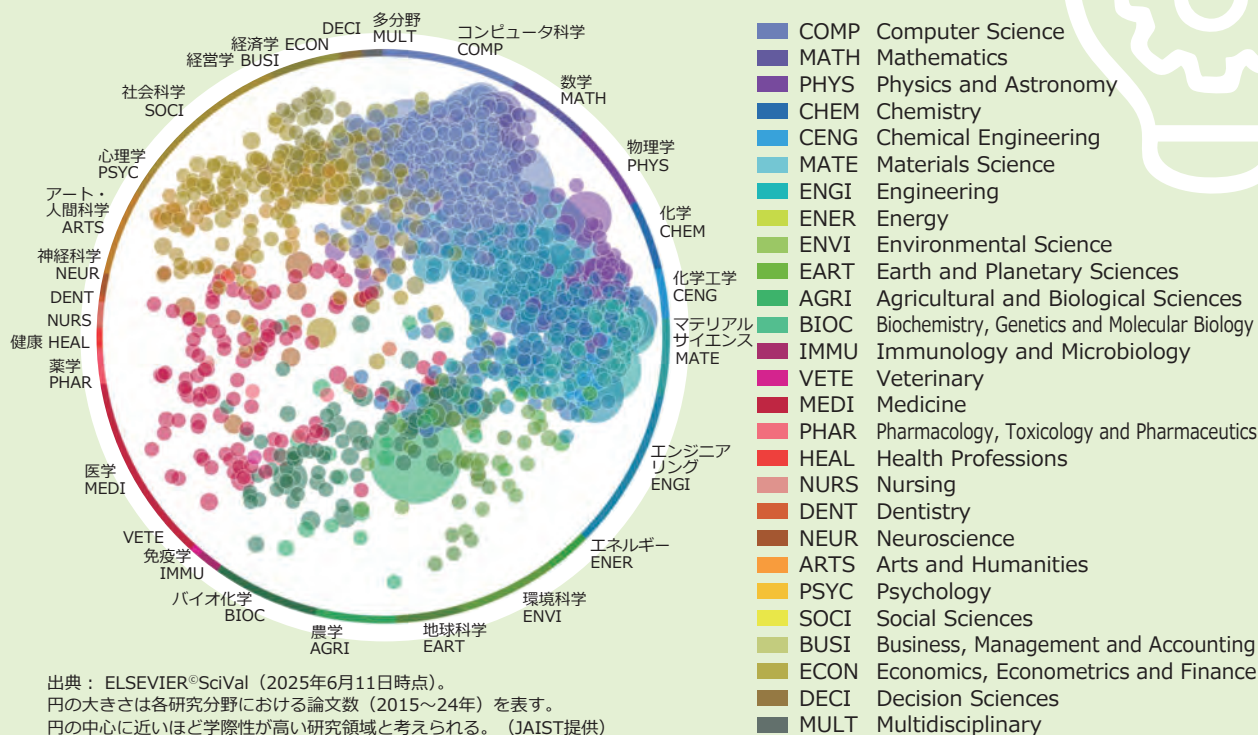
93%

2024年度

RESEARCH 研究と技術革新

研究の得意領域（分野別論文数）

学問分野の枠を超えた刺激的な環境のもと国際的な指標が物語る、充実の研究体制



国際共著論文数

計算機科学・人工知能カテゴリ
国内大学中

1位

出典：文部科学省科学技術・学術政策研究所（NISTEP）による調査（2024年6月発行）「研究論文に着目した日独英の大学ベンチマーキング2023（調査対象期間2017～2021年）」

被引用 トップ10%論文数

407編

2015～2024年 出典：Elsevier社SciVal

大学発ベンチャー 認定企業数

5社

2025年5月1日現在

国際共著論文比率

46.5%

国内
全大学中 7位

全国立大学中 3位

出典：大学ランキング2026年版（朝日新聞出版）

特許保有件数

140件

2025年3月31日現在

CAMPUS

資源と環境

開学 

1990 年

土地面積 

113,063 m²



東京ドーム
2.4 個分

蔵書数 

161,897 冊

2025年3月31日現在

総資産 

17,842 百万円

2025年3月31日現在

電子図書館サービス 

5,673 タイトルの
電子ジャーナル

21,936 タイトルの
電子ブック

2025年3月31日現在

経常収益 (2024年度) 

7,828 百万円

経常費用 (2024年度) 

7,406 百万円

GLOBAL

国際性と交流

外国人留学生数・留学生割合 

499 人 44.8 %

2025年5月1日現在

留学生出身国数

20 か国

2025年5月1日現在

国際交流協定数

128 機関

2025年7月1日現在

グローバルな共同研究活動 (国際共著論文数)



出典：ELSEVIER社®SciVal（データ更新日：2025年6月11日）。円の大きさは海外研究機関所在国別の共著論文数（2015～2024年）を表す。

Vision

JAIST 未来ビジョン

世界トップの研究大学を目指して

本学は、創立以来、先端科学技術の広い分野で世界トップレベルの研究を推進し、これを背景とした人材育成と社会貢献に努めるとともに、大学改革の先導的モデルとして新しい大学院像を示してきました。この使命を受け継ぎつつ、独自の研究の高度化と先鋭化を進め、『世界トップの研究大学』へと飛躍するためのビジョンと基本戦略を策定し、その実現を通じて世界の持続的発展に貢献します。

1



研究

本学独自の研究の高度化・先鋭化と
グローバルな共創的イノベーション
創出研究の推進

2



教育

『しなやかな強さと共創力』を備え
自主性に富んだ
グローバルリーダーの育成

3



社会貢献

高度でダイナミックな社会連携と
人材循環による社会貢献

4



経営

組織・業務改革と
人事マネジメント改革に基づく
戦略的経営

ビジョン

独自の研究の高度化と先鋭化を進めつつ、国内外の大学や研究機関、産業界とのグローバルな連携に基づく新たな共創により、科学技術の未来を拓き世界の持続的発展に貢献するイノベーション創出拠点として、世界トップの研究大学を目指します。全学一研究科体制の下、意欲に溢れた学生を国内外から広く受け入れ、先端科学技術の確かな専門性を持ち、新たな時代を先導する『しなやかな強さと共創力』を備えたグローバルリーダーとして育成します。

基本戦略

本学独自の研究の高度化・先鋭化を進めつつ、国内外の大学や研究機関とのグローバルな学術的連携と研究成果の社会実装を目指した産業界との幅広く緊密な連携により、科学技術の未来を拓き社会に変革をもたらす共創的イノベーション創出研究を推進します。研究力向上を目指した博士後期課程の重点化を推進します。

意欲に溢れた学生を国内外から広く受け入れ、個々の学生の学修計画に対応し得る先進的な教育カリキュラムと世界トップレベルの研究を通じた専門性の高い研究室教育に加えて、産業界の知を教育にも活用することで、幅広い視野とともに『しなやかな強さと共創力』を備え自主性に富んだグローバルリーダーとして育成します。

世界トップレベルの研究を背景とした、高度でダイナミックな社会連携と多彩なリカレント教育による人材循環により、世界の持続的な発展に貢献します。

多様な取組による強固な財務基盤の構築とともに、デジタル化の推進による組織・業務改革と人事マネジメント改革により、世界トップの研究大学を目指すイノベーション創出拠点として戦略的経営を推進します。

実現に向けた施策

- 1 独自の研究の高度化・先鋭化と新しい研究分野・研究領域の開拓
- 2 JAIST サイエンスハブの構築
- 3 研究支援制度・体制の拡充

- 1 『しなやかな強さと共創力』を涵養しリーダーシップを育む教育研究制度の充実
- 2 カリキュラムおよび教育システムの改革
- 3 意欲に溢れた多様な学生の獲得
- 4 産業界との連携を通じた共創型イノベーション人材の育成
- 5 多様なニーズを踏まえた学生支援

- 1 最先端研究・融合研究を背景とした高度でダイナミックな社会連携の推進
- 2 産学官連携組織・体制の充実
- 3 特色ある多様なリカレント教育の推進

- 1 強固な経営基盤の構築
- 2 業務運営におけるデジタル化の推進
- 3 人事マネジメント改革の推進
- 4 大学運営の可視化と積極的な情報発信の推進



JAIST ギャラリー

本パズル作家・コレクターとして国内外に有名な故芦ヶ原伸之氏（よしがはら のぶゆき 1936 年 -2004 年）による、我が国で最大級のパズルコレクション（約 1 万点）のうち、厳選した約 200 点を展示。キューブパズルをイメージしたデザイン。

設計：松田達／松田達建築設計事務所
林野紀子／りんの設計一級建築士事務所

Performance

活動報告

11 研究

17 教育

23 社会貢献

27 経営

28 組織体制

世界初の証明で切り拓く、 新たな数学パズルの地平



120年以上、誰も解けなかったパズルに、ついに終止符が打たれました。

その快挙を成し遂げたのが、コンピューティング科学研究領域の上原隆平教授と鎌田斗南助教です。

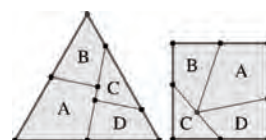
彼らが挑んだのは、「裁ち合わせパズル」と

いう、与えられた図形をなるべく少ないピースに分割して、別の図形に組み替えるという幾何学的な遊び。その中でも特に有名なのが、正三角形を4つに切り分けて正方形を作るという「デュードニーの裁ち合わせパズル」です。この問題は、イギリスのパズル作家デュードニーによって1902年に発表されて以来、「本当に最小の4ピースなのか？それより少ないピースで変形できるのでは？」という疑問が

120年以上も未解決のままでした。

この謎に、上原研究室と米国マサチューセッツ工科大学(MIT)、本学コンピューティング科学研究領域のErik Demaine(エリック・ドメイン)教授が共同で挑戦。鍵を握ったのは、鎌田助教が独自に考案した新しい数学的証明技法でした。

三角形と正方形の辺や頂点が、ピースを通してどう対応するかを可視化するグラフ構造である「マッチ



ングダイアグラム」という新手法で、各パターンが持つ頂点や辺の対応関係を数学的に整理しました。最後に、すべてのケースにおいて「矛盾」が生じることを示し、不可能性を確定させたことで、2024年、ついに「このパズルは4ピースが最小で、3ピース以下では不可能である」という“最適性”を世界で初めて証明したのです。

上原 隆平

副学長(研究科改革担当)
先端科学技術研究科長
コンピューティング科学研究領域 教授

鎌田 斗南

コンピューティング科学研究領域 助教



この成果は、単なる一つのパズルの解決にとどまりません。従来の裁ち合わせ問題では、「こうすればできる」という実例を示すことはできても、「それ以下ではできない」といった不可能性への証明は困難とされてきました。しかし今回の技法により、「できないことを証明する」という、これまで難しかった領域への突破口が開かれました。

この技術は、他の類似パズルや数学的最適化問題にも応用が期待されるだけでなく、パッチワークや折り紙など、工芸や設計の分野にもインスピレーションを与える可能性を秘めています。



本研究は、2024年12月に学術サイト「arXiv」にて公開され、2025年1月には京都大学で開催された「冬のLAシンポジウム」にて発表。「LA/EATCS-Japan発表論文賞」を受賞するな

ど、国内外の研究者からも高く評価されています。

100年以上前に投げかけられた問いに、現代の数学と創造力で答えを出した二人の研究者。その探求心と挑戦の姿勢は、私たちの知の限界を広げ、未来のイノベーションへとつながっていきます。



上原隆平教授 研究室





しわが生む やさしい“手”で、 農業の未来を支える

—ホ アン ヴァン教授が語る「ROSEハンド」開発の最前線—



私はこれまで、“柔らかさ”を活かしたロボットの可能性を追求してきました。特に注目しているのが、素材が変形することで“意図した動き”を生み出す現象です。硬い機械では難しかった繊細な動きを、柔らかさによって実現する。それがソフトロボットの魅力であり、可能性でもあります。その中で出会ったのが、

農作物という多様で壊れやすい対象を“やさしく確実につかむ”という現場の課題です。

農業の世界では、収穫対象となる農作物の形や大きさ、硬さが非常に多様です。たとえば、イチゴのように柔らかいものもあれば、キノコのように形が不規則なものもあります。こうした作物を傷つけずに“つかむ”という動作は、実はとても難しく、従来のロボットハンドでは対応が困難でした。

そこで私たちのチームが開発したのが、「ROSE（ローズ）ハンド」です。これは、バラが開くような美しい動きからヒントを得ています。柔らかい素材の二重構造——内側と外側のスキンの間に空間があり、内側だけを回転させることで、外側とのずれが生じ、“しわ”が次々に生まれます。その結果、中央がしぼみ、バラの花びらのように収縮して対象物を包み込むのです。

ホ アン ヴァン

ナノマテリアル・デバイス研究領域 教授



機能をさらに最適化することができました。

実験では、キノコやイチゴといったデリケートな作物の収穫に成功。従来のロボットでは難しかった作業も、「ROSEハンド」なら確実にこなせることが証明されました。これは、農業の現場における自動化や省力化に大きく貢献できると考えています。

この成果は2024年9月に、ロボティクス分野の国際的な学術誌に掲載され、2025年には「8th IEEE-RAS International Conference on Soft Robotics (RoboSoft 2025) Competition」において、Manipulation Challenge 1st Placeを獲得しました。2024年度にスタートアップ支援プログラムにも採択され、商品化への歩みを加速させています。

日本では高齢化による農業人口の減少が深刻な課題となっており、自動化技術の導入が強く求められています。「ROSEハンド」は、そういった現場に寄り添い、支えとなる“もう一本の手”になれると信じています。また、この技術は、農業にとどまらず、介護機器や物流ロボットなど、“柔らかさと確実さ”を求められる領域への展開も視野に入れており、幅広い社会課題解決の可能性を秘めています。



ホ アン ヴァン 研究室

一般的に、ロボット設計において「しわ」や「たわみ」は避けたい現象とされています。しかし、私たちはあえてその“しわ”に注目し、把持（はじ＝つかむ）動作に活かしました。しわが生まれる位置や量を制御することで、異なる形状の作物にも柔軟に対応できるようになったのです。

この仕組みを理論的に裏付けるため、有限要素解析ソフト「Abaqus（アバカス）」を使って、変形やひずみの様子を詳細にシミュレーションしました。その結果、「ROSEハンド」の構造や素材の厚みなど、細かな設計パラメータが把持性能にどう影響するかが明らかになり、



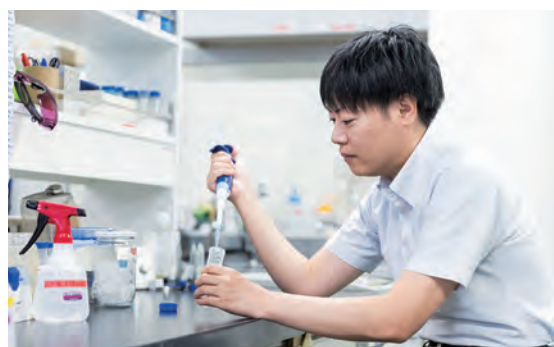


細菌に“マイホーム”を 与えてみたら— がん治療に向けた 思いがけないブレイクスルー

「もし細菌にとって快適な“家”を用意したら、
がんと闘う力も強くなるのではないかな？」
そんなちょっとした遊び心から、今回の研究
が始まりました。

私たちのチームは、がん細胞の中でも特に低
酸素な環境に集まりやすい特殊な細菌「AUN
(阿吽)」を用いて、細菌療法の新しい可能性を
探っています。AUNは、人間の体内でがん細
胞を選択的に標的とする性質を持ち、その抗
腫瘍効果はこれまでも実証されてきました。
しかし、より高い効果と安定性を実現するた
めには、「どう育てるか」が極めて重要です。

私たちが注目したのが、水槽で使われるセラ
ミック製のろ過材でした。アクアリウムの世界
では、このろ過材が水中の汚れを分解する細
菌の“住まい”として機能します。つまり、細
菌が快適に暮らせる環境を整えるための素材
です。



さっそくこのろ過材でAUNを培養し、乳がん
モデルマウスに投与してみたところ、従来の
方法と比べて、がんの進行を抑える力が大幅
に高まったのです。しかも、副作用はなく、
生存率も飛躍的に向上しました。

この現状を引き起こした“鍵”が、ろ過材に含
まれていた「酸化チタン(TiO_2)」です。これは、
光を受けて活性酸素(ROS)を生み出す「光触
媒」として知られています。私たちは、 TiO_2 が
細菌に“過度なストレス”を与えることで、生

都 英次郎

物質化学フロンティア研究領域 教授

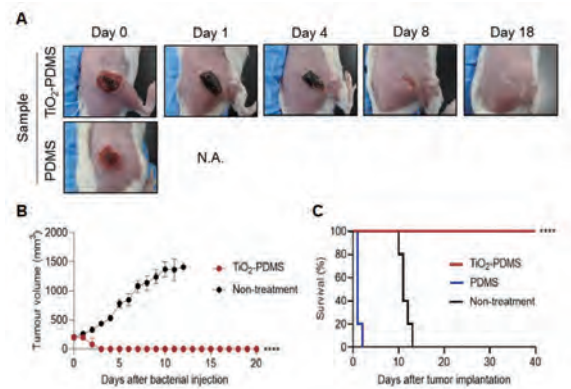


体への適合性を高め、より安全かつ効果的な抗がん細菌へと変化させているのではないかと考えました。

仮説を確かめるため、 TiO_2 を内包した新たな多孔質材料「 TiO_2 -PDMS」を作り、その中でAUNを培養。すると、わずか一回の投与で腫瘍が完全に消失したのです。これには、私たち自身も驚かされました。

さらに、腫瘍組織内での免疫細胞の挙動を調べた結果、AUNが投与された後にT細胞やマクロファージが活性化し、炎症性サイトカイン(TNF- α)も増加していることがわかりました。つまり、この細胞は単にがん細胞を直接攻撃するだけでなく、「免疫を味方につける」という、二重のメカニズムでがんを撃退していたのです。

こうした結果は、2024年10月に国際学術誌『Chemical Engineering Journal』にも掲載さ



れました。がん細菌療法はまだ新しい分野ですが、私たちの研究は、より安全で効果的な治療へと近づく一歩になったと自負しています。

今後は、より大きな動物モデルや臨床応用に向けた研究を進める予定です。

“がんを治す細菌”というと、少しSFのように聞こえるかもしれませんが、でも、そこに確かな科学の裏付けと安全性があれば、決して夢物語ではないと、私は信じています。

細菌に“家”を与え、そこに光触媒をしのばせる——そんなシンプルな工夫が、がん治療に革命をもたらす可能性を秘めています。AUNという“味方の細菌”と、光と素材の協力が生み出す奇跡を、これからも追いかけていきたいと思っています。



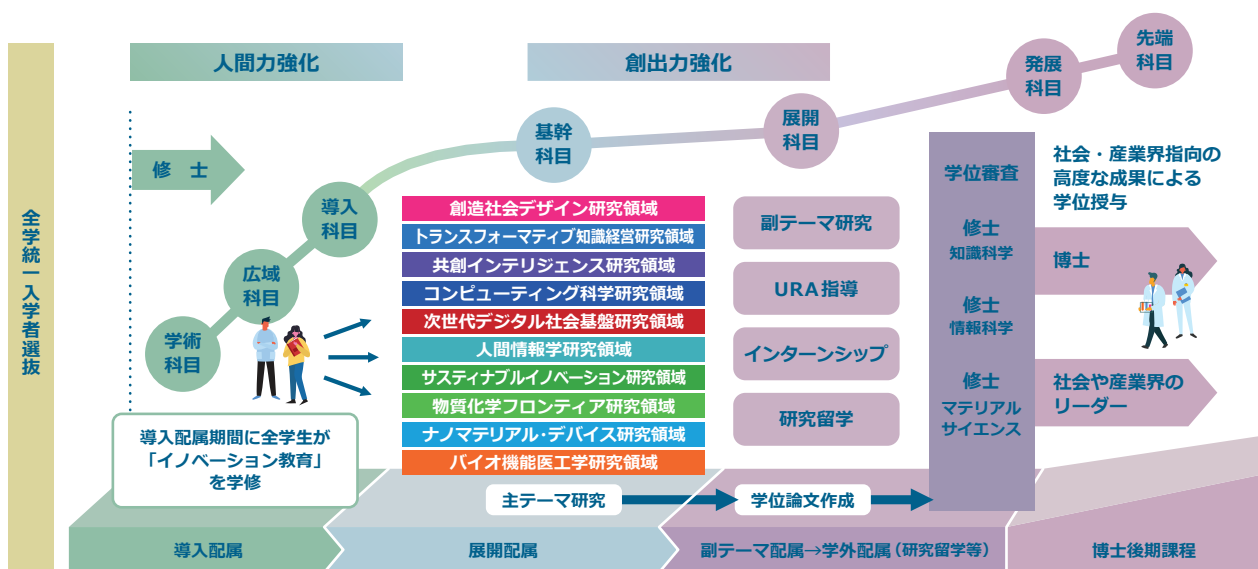
都 英次郎 研究室



教 育

本学の教育の特色

先端科学技術の確かな専門性ととも、幅広い視野や高い自主性、優れたコミュニケーション能力を備えた、社会や産業界のリーダーを育成するため、以下のような特色ある教育を行っています。



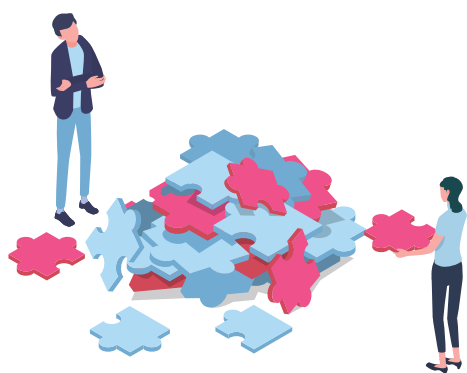
段階的な履修指導

学生の多様な背景とキャリア目標に応じた柔軟かつ計画的な履修指導を行っています。

入学後の最初のクォーターでは、入学前の専門分野にかかわらず、「導入配属」としていずれかの研究室に仮配属し、グローバルな問題意識を醸成する「学術科目」、幅広い教養の涵養やキャリア形成を支援する「広域科目」、入学前の学修歴に応じた「導入科目」を中心に幅広く履修します。その過程で、自らのキャリア目標を明確にし、知識科学、情報科学、マテリアルサイエンスのいずれの学位取得を目指すかを選択した

上で、正式な研究指導を行う研究室に「展開配属」されます。

履修指導は、学生自身が指導教員とのコミュニケーションを通じて作成する「学修計画・記録書」に沿って進められます。これにより、自らの専門性を深化・螺旋的に発展させる「基幹科目」やより高度な専門性を獲得する「展開科目」を体系的に履修することが可能です。また、個々のキャリア目標や学修歴、研究計画等に応じて、異なる学位に対応した科目を修了要件に加えることもできる柔軟な制度設計となっています。



01 複数教員指導制

学生1名に対して、主指導教員に加え、副指導教員および副テーマまたはインターンシップ指導教員の計3名が教育・研究の指導にあたります。さらに、研究室教育ポリシー等に沿って学修活動全般にわたる指導・相談を行っています。



02 主テーマ・副テーマ制



専攻分野に関する主テーマ研究（修士論文研究又は修士課題研究、博士研究計画調査、博士論文研究）のほか、副テーマ研究において関連分野の知識等を修得し、幅広い視点から研究を行う能力を養成します。これにより、多様な課題に対応可能な応用力を身につけることができます。なお、副テーマ研究に代えてインターンシップの選択も可能です。

03 キャリア目標等に応じた研究指導

学生が求めるキャリア目標や学修歴などに応じ、グループワーク形式での副テーマ研究の実施、異分野の教員や産業界から招へいする URA との協働、国内外へのインターンシップ・研究留学など、多様な機会を提供し、学位論文の完成に向けた実践的な支援を行っています。

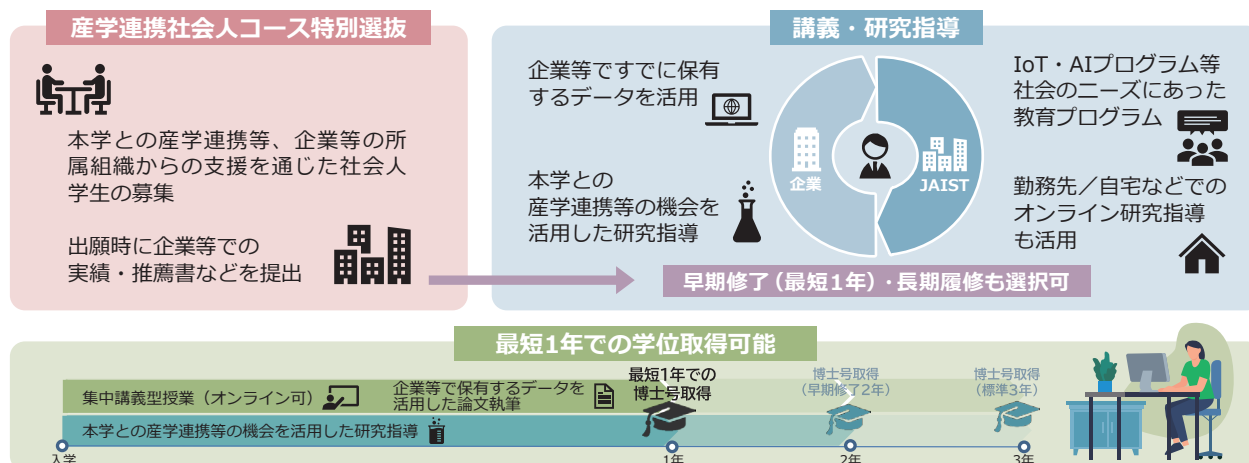


産学連携社会人コース(博士後期課程)の開設

本学は、これまで働きながら学位取得を目指す社会人に向けたプログラムを開設し、多くの社会人学生を受け入れてきました。こうした取組をさらに発展させ、2025年4月より新たに「産学連携社会人コース(博士後期課程)」を開設しました。

本コースは、企業等の所属組織による支援のもと、博士の学位を目指す社会人のために設置するもので、最短で1年間での修了を目指す早期修了プログラムと標準3年間での修了を目指す一般プログラムの2つがあります。本コースを通じて、知識科学、情報科学、マテリアルサイエンスのいずれかの博士号を取得することが可能です。

また、企業等において既に保有しているデータや調査・分析資料を活用し、博士論文をまとめることができる点も本コースの大きな特徴の一つです。講義及び研究指導は石川キャンパス及び東京サテライトで実施されるほか、オンライン形式で受講できる機会もあります。企業等での研究実績や保有データを活用する際には、本学との共同研究契約が期待されます。



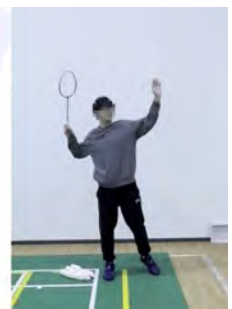
文部科学省「大学・高専機能強化支援事業」採択

—高度情報専門人材育成に向けた新コース「JAIST×Humanコース」の開設—

文部科学省2024年度「大学・高専機能強化支援事業(高度情報専門人材の確保に向けた機能強化に係る支援)」に採択され、2025年10月から、新たに「高度情報専門人材育成コース(通称、JAIST×Humanコース)」を開設しました。

「データ×AI時代」といわれる現代において、データサイエンスは非常に重要な学問分野になっています。しかしながら、人間中心社会(Society 5.0)の実現に向けた人材育成においては、データサイエンス・AIだけを学ばばよいわけではありません。データサイエンス・AIを中心としたIoTやサイバーセキュリティ、マン・マシンインタラクション、人間情報学といった高度な知識を複合的に有する情報人材の育成が喫緊の課題になっています。

本コースの目的は、産業界において要請が高いAIソリューション技術やAI倫理の知識を兼ね備え、AIと人との共生社会における次世代AIの研究開発に取り組み、多様なAIソリューションの創出において網羅的かつ複合的に課題解決できる、次世代AI社会の創成を担う高度情報専門人材を育成することです。そのため、本コースJAIST×Human(Joint Ai Interaction cyberSecuriTy × Human)では、4つの分野(AI×インタラクション×サイバーセキュリティ×ヒューマン)を複合的にカバーしたカリキュラムを用意し、次世代AIの研究開発課題に取り組む人材を育成します。



AI

- ▶ 深層学習
- ▶ 説明可能 AI
- ▶ 自然言語処理
- ▶ 機械学習理論
- ▶ 人間中心 AI

機械学習 演習

インタラクティブ AI

数理工学
アルゴリズム
AI セキュリティ
暗号
セキュリティ対策
脅威やリスク
認証技術

共通
AI 倫理教育・
ヒトを対象とする
研究倫理教育・
データサイエンス

心理統計学 演習

マルチモーダル
原理・メカニズム
HRI/HCI
知覚情報処理
センシング

インタラクション

- ▶ マルチモーダル
インタラクション
- ▶ 人間拡張
- ▶ 認知科学
- ▶ VR/AR/MR
- ▶ HCI

サイバーセキュリティ

- ▶ サイバーセキュリティ
- ▶ ネットワークセキュリティ
- ▶ 生体認証
- ▶ AI セキュリティ

サイバー セキュリティ 演習

ヒューマン

- ▶ 音声・聴覚情報
- ▶ 視覚・触覚
- ▶ AI 教育
- ▶ 環境センシング
- ▶ 多感覚知覚・統合

知覚実験 演習

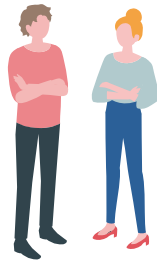
ASEANの協定校との国際連携強化

本学は創設以来、海外の主要大学との学術交流協定を通じて、協働教育プログラムなど、活発な国際交流を積極的に推進してきましたが、2024年度からは、さらに交流を進展させるため、ASEANの協定校と、連携講座に基づく新たな「JAIST・協定校接続プログラム(JUMP)」を開始しました。JUMPは、協定校の学部3・4年生を対象に、短期インターンシップ生として本学に受け入れることで、協定校の教員と本学教員による共同プロジェクトや国際共著論文の創出が期待され、両大学間の国際教育連携をより強化するものです。

2024年度はタイのマヒドン大学、マレーシア国民大学、インドネシアコンピュータ大学から学生を受け入れました。今後は、ASEANの他の協定校に対象を拡大し、グローバル人材育成と国際研究ネットワークの強化を両輪とする国際連携をさらに推進していきます。



マヒドン大学工学部の関係者が本学を訪問



マレーシア国民大学での調印式

インターンシップに参加した学生のコメント



インターンシップの学生にとって、母国では入手できないような高度なツールを用いて JAIST がどのように研究を行っているかを知ることは有益だと思います。そうすることで、インターンシップでの研究経験がより価値あるものになるでしょう。(マレーシア出身)

インターンシップは素晴らしい学習体験となり、刺激的なプロジェクトに携わりながら新しい環境に適応することができました。研究以外にも、日本の様々な場所を訪れ、文化を体験し、日常生活の課題を乗り越える機会を得ることができました。(マレーシア出身)



素晴らしいチューターがいたので、来日当初から日常生活に適応するのに大きな困難に直面することはありませんでした。(インドネシア出身)

サポート体制の整った研究環境と、先生と研究室のメンバーからの指導のおかげで、この経験は非常に有意義なものとなりました。(インドネシア出身)



博士後期課程学生への支援の充実

科学技術振興機構(JST)の「次世代研究者挑戦的研究プログラム(SPRING)」および「未来創造次世代AI博士人材育成プログラム事業(BOOST)」の2事業に採択され、博士後期課程学生の研究力向上とキャリア形成支援を実施しています。

これらの事業では、研究奨励金の支給やキャリア支援の機会の提供などを通じて、博士学生が挑戦的かつ社会的インパクトの高い研究に取り組むことを支援しています。

未来創造イノベーション博士人材支援プログラム JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム(SPRING)

2024年度の採用実績

博士後期課程 1年次：15名、
2年次：10名、3年次：10名

育成する人材像

卓越した専門的な研究力に加え、共創力、国際性、人間力などのイノベーション創出の担い手たるべき資質を兼ね備え、不確かな時代でも先を見通し、幅広く我が国の科学技術・イノベーションの創出に貢献できる博士人材。

プログラムの特徴

研究に専念できる研究奨励金(生活費相当)及び研究費を配分/充実した学外研鑽の機会を提供/社会の様々な場面で必要となる能力を涵養

研究奨励金(生活費相当額)

初年度 180 万円(月 15 万円)

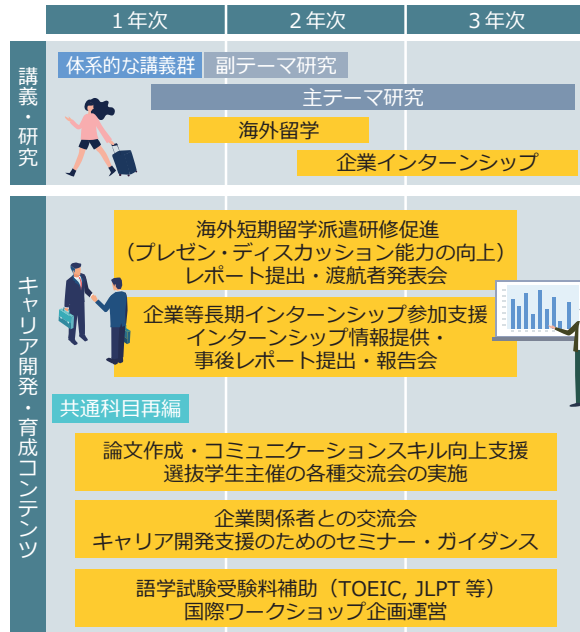
1 年間の成果報告の評価に基づき、

優秀な学生には増額(月 18 万円、月 20 万円)



研究費年額 40 万円

別途、研究目的の海外留学に対する支援あり(期中追加配分)。学生の計画に基づき支給額を決定。

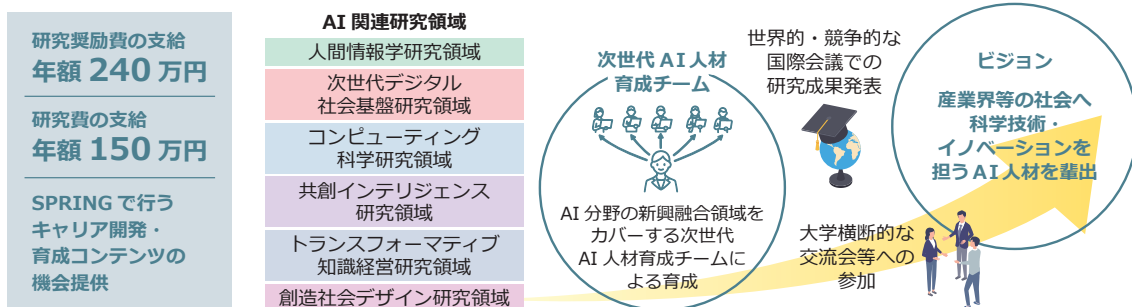


未来創造次世代AI博士人材育成プログラム

JST 国家戦略分野の若手研究者及び博士後期課程学生の育成事業(BOOST)

2024年度の採用実績

博士後期課程
1年次：2名



対象：次世代 AI の研究開発を通じた科学技術・イノベーションの発展に貢献できる卓越した人材(博士後期課程 2 名/年)



第3回 株式会社GenesisAI
代表取締役 今井翔太 氏

「JAIST BOOST-SPRING Symposium」を開催

2024年度には「JAIST BOOST-SPRING Symposium」を3回開催し、学外から著名な研究者や企業人を招いた講演会およびパネルディスカッションを実施しました。SPRINGおよびBOOSTの支援を受ける博士後期課程学生が講演者との積極的な意見交換を行いました。



開催レポートは
こちらから
ご覧いただけます

学生支援

新入生オリエンテーション企画－ストロタワー演習を実施－

「デザイン思考」「システム思考」「イノベーションマネジメント」の3手法を組み合わせた独自の「日本型イノベーションデザイン教育」を全学的に実施しています。この教育の導入機会として、入学直後に全新生を対象とした新入生オリエンテーションを実施しており、学際的・国際的な環境での協働の基礎を築く場としています。

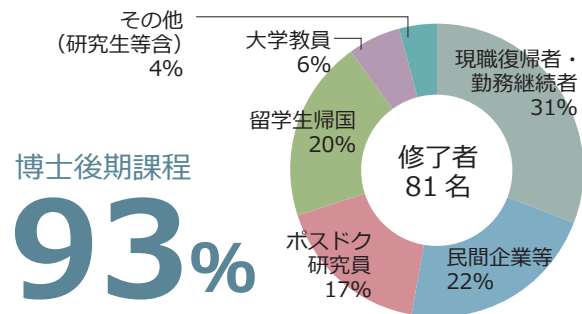
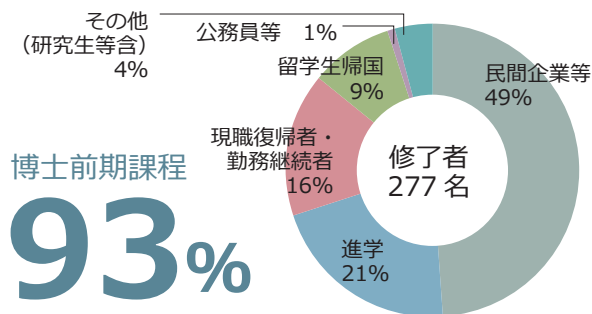
2024年度は、オリエンテーションの一環として「ストロタワー演習」を実施しました。この演習では、分野や国籍を越えてランダムに編成された5名程度のグループが、制限時間内に独自のストロタワーの設計・制作に取り組みました。各グループは創意工夫を凝らしながら課題に取り組み、完成後は、タワーの構造やコンセプトについて、相互評価を行いました。本演習では、日本人学生と留学生、各課程学生がグループに混在し、異なる視点や価値観の交差を通じて、新たな発想が生み出されるプロセスを体験することができました。

また、先輩在学生がアシスタントとして参加し、新入生へのサポートや交流の機会を提供することで、学内コミュニティの形成にもつながりました。



就職・キャリア形成支援

●2024年度修了者の就職率／進路状況



●主な支援内容

- ・企業から届いた求人やインターンシップ等に関する情報提供
- ・インターンシップガイダンス、理系就職対策講座、合同業界研究セミナー等の開催
- ・修了生と連携した就職支援
- ・キャリア開発カウンセラーによる個別就職相談
- ・外国人留学生向けの就職支援

●博士学生への支援

博士後期課程に特化した就職ガイダンスや、様々な企業関係者との交流の機会を提供するなど、博士後期課程学生のキャリア開発を支援しています。

また、就職や経済面の不安の軽減を図るとともに、企業ニーズに応える博士人材の輩出を目的として、本学独自の「産業界と連携した博士人材育成制度」を設けています。本制度は、本学博士後期課程に学内進学を希望する博士前期課程学生を対象に、企業とのマッチングを行い、双方の合意が得られれば、博士後期課程修了後の当該企業への入社内定、在学中の研究インターンシップの受け入れや先輩社員によるメンタリング、在学中に利用した日本学生支援機構(JASSO)貸与型奨学金の返済支援(希望者のみ)などのサポートを行うもので、2024年度までに学生4名を支援してきました。

近年、博士後期課程修了者のうち産業界へ就職する割合が増加しており、進路として産業界に目を向ける傾向が高まっています。



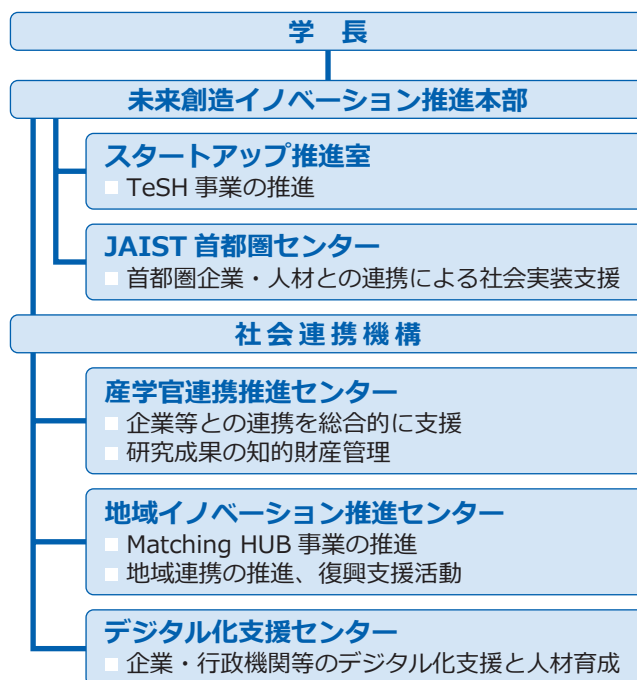
学内合同業界研究セミナー

社会貢献

産学官連携推進体制

学長直轄の「未来創造イノベーション推進本部」のもと、産学官連携に関する様々な機能を持つ組織を集約しています。これにより、研究活動の活性化から技術の社会実装に至るまでをシームレスに支援する体制を構築しています。

この体制により、大学が有する知的資源や研究成果を、地域社会や企業、行政との連携を通じてスピーディーに社会へと還元し、イノベーションの創出を推進することで、地域から地球規模に至る社会課題を解決し、地域経済の活性化や地方創生への貢献を、より迅速かつ確実に実現していきます。



産学官連携の取組事例

TeSH 事業の推進

文部科学省 2023 年度「大学発新産業創出基金事業・スタートアップ・エコシステム共創プログラム」において、北陸 3 県の 13 大学および 3 高専が連携して提案した「Tech Startup HOKURIKU (TeSH)」の採択を受けました。金沢大学とともに主幹機関として本事業を推進しており、本学のスタートアップ推進室が TeSH の事務局として本事業の運営を担っています。

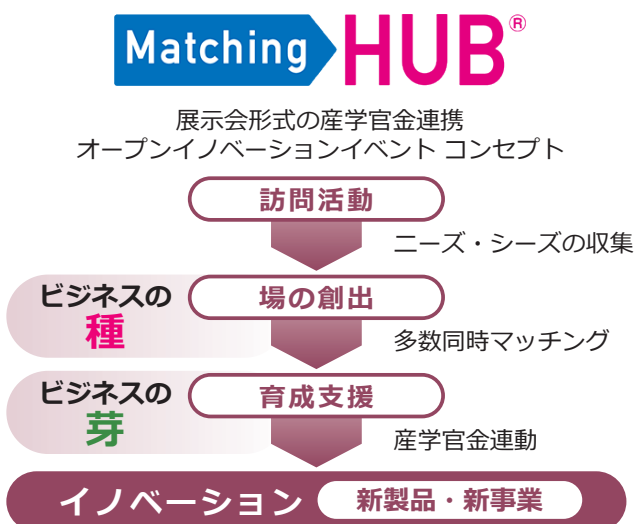
TeSH では、北陸地域のアカデミアにおける有望な研究シーズを発掘し、大学等発スタートアップの創出に向けて、研究成果と事業化の間に存在するギャップを埋める「ギャップファンドプログラム」を運営しています。2024 年度には、応用研究を支援する「ステップ 1」で 21 件（本学 4 件）、概念実証からスタートアップ組成までを支援する「ステップ 2」で 4 件（本学 1 件）を採択しました。

また、これまで北陸のアカデミアとはあまり関わりのなかったベンチャーキャピタル（VC）を事業化推進機関として多数参画させ、TeSH の主導のもとで研究者とのマッチングを積極的に進めています。

こうした取り組みを通じて、北陸地域における大学等発スタートアップを質量ともに格段に充実させ、北陸発の上場企業や世界にはばたく新産業の育成を目指します。これにより地域活性化を促進するとともに、新たな人材ニーズや設備投資につなげることで、北陸地域の社会課題の解決に貢献していきます。



Matching HUB 事業の推進



地方創生・地域活性化を目指し、地域の大学・企業・行政・金融機関等をつなぐ「Matching HUB」事業を推進しています。本事業は、本学のURA（リサーチ・アドミニストレーター）が収集した地域の大学や企業などのシーズやニーズ、行政や金融機関などからの支援を集約・マッチングすることで、新製品や新事業につながる「種」を数多く同時に作ることを目的としています。



Matching HUB Hokuriku の開催

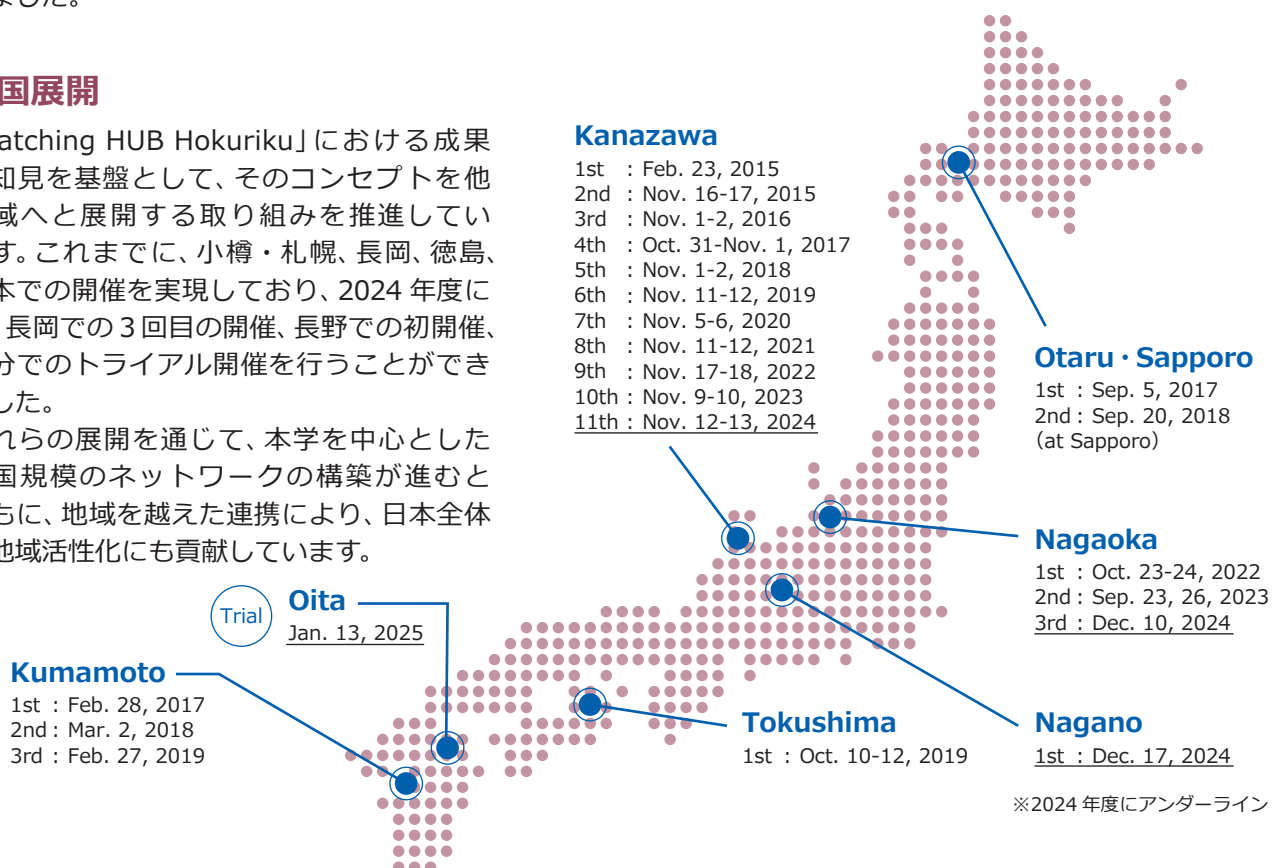
2024年11月12日・13日の2日間、ANA クラウンプラザホテル金沢にて、第11回目となる「Matching HUB Hokuriku 2024」を開催し、延べ1,757名の方にご参加いただきました。

2日目のパネル展示では、北陸3県を中心に全国各地からさまざまな業種の企業・団体が参加し、合計192ブースが出展されました。本学のURAが産学連携や企業間連携のマッチング支援を行った結果、出展者アンケートでは、出展者1社あたり平均2件以上の成果（商談や共同研究など）が報告されるなど、多くのビジネスの「種」を生み出すことに成功しました。

全国展開

「Matching HUB Hokuriku」における成果と知見を基盤として、そのコンセプトを他地域へと展開する取り組みを推進しています。これまでに、小樽・札幌・長岡・徳島・熊本での開催を実現しており、2024年度には、長岡での3回目の開催、長野での初開催、大分でのトライアル開催を行うことができました。

これらの展開を通じて、本学を中心とした全国規模のネットワークの構築が進むとともに、地域を越えた連携により、日本全体の地域活性化にも貢献しています。



復興支援タスクフォースの活動

地域イノベーション推進センターでは、2024 年 1 月に発生した能登半島地震を受けて、被災地域の企業・団体に対する支援を目的とした「復興支援タスクフォース」を立ち上げました。

本タスクフォースは、これまで「Matching HUB」事業を通じて培ってきた地域活性化に関するノウハウや、北陸地域内外の産学官金のネットワークを活用し、地域企業の復興支援に取り組んでいます。

2024 年度には能登地域の企業等を延べ 100 回以上訪問し、現地の状況や課題、再建に向けたニーズやシーズの把握に努めました。これらの情報をもとに本学や Matching HUB の出展企業等とマッチングすることによって複数の復興プロジェクトの創出と支援を進めています。

2024 年 11 月に開催した「Matching HUB Hokuriku 2024」では、能登地域の企業を招待し、重点的なマッチング支援を実施しました。将来的には能登地域での Matching HUB 開催も視野に入れながら、今後も本タスクフォースと Matching HUB との連携をさらに強化し、能登地域の創造的復興の支援に取り組んでいきます。



JAIST 能登復興支援タスクフォースロゴ

復興プロジェクトの例

重蔵神社 1300 年の歴史資源を活用した観光資源開発及び関係人口創出復興事業

神社の歴史的価値を見直す共同研究を本学と実施し、北陸をはじめとする「Matching HUB」の全国ネットワークを活用して情報発信を行うことにより、所有する宝物や曳山祭りをはじめとする各種祭事が持つ物語を通じて、「古くて新しい輪島の魅力」を広く発信し、潜在的なファン（消費者・サポーター）の創出を目指しています。

能登の工芸文化のアーカイブとデジタル市場への販売展開調査

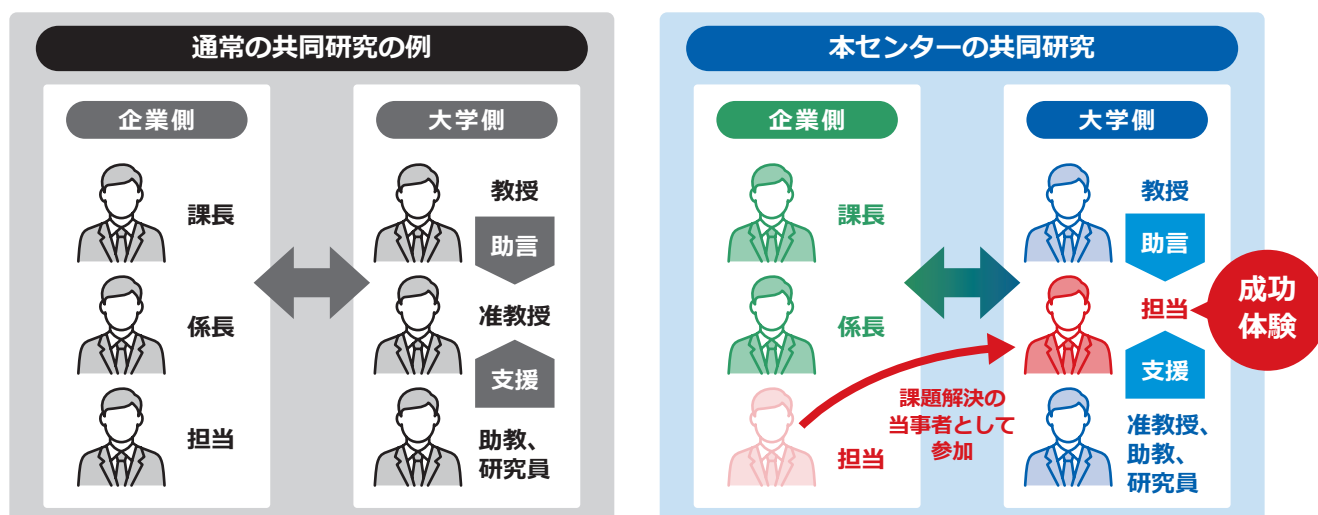
アナログで保存・継承されてきた能登の工芸文化をデジタル資産へと転換し、今後の技術継承や工芸・文化の保存・修復への利活用を目指します。そのために、被災した能登の作家を中心に、デジタル化に対するニーズやデジタル市場に関するマーケティング調査を実施し、技術調査支援やスキャニング技術などのデジタル化に向けた共同研究を行っています。

企業・行政機関等のデジタル化支援と人材育成

デジタル化支援センターでは、企業や行政機関等との共同研究等を通じて、組織におけるデジタル化の推進や、デジタル化に対応した製品開発の支援を行っています。

本センターが推進する共同研究の特徴は、本学が有する知的資源を活用し課題解決を図るだけでなく、共同研究等の過程において、課題を抱える当該組織の担当者に対して考え方の指導や技術的な支援を行う点にあります。これにより、担当者に成功体験を提供し、将来的に自らの力で課題解決に取り組むことのできる自立的なデジタル人材の育成を目指しています。2024 年度には、このような形式の共同研究を 9 件（企業 6 件、行政機関等 3 件）実施しました。

こうした取り組みを通じて、企業や行政機関等のデジタル化およびデジタル人材の育成を支援し、ひいては地域社会の課題解決に貢献していきます。



自治体との包括協定

地域社会の持続的な発展と課題解決に貢献するため、大学の人的・知的資源を活用し、地元自治体と連携・協力を進めています。その一環として、能美市、小松市、加賀市、野々市市、白山市、内灘町、中能登町と、包括的な連携協定を締結しています。

これらの連携先と協働し、以下のような取り組みを実施しています。

能美市

能美市子ども未来創造 フェスティバル

能美市では、市内の小中学生がものづくりを通して科学への理解を深め、地域の未来を担う人材を育成することを目的に、「能美市子ども未来創造フェスティバル」を毎年開催しています。本学は共催機関の一つとして、実行委員会への参画等を行っています。

2024年度の同イベント内の「サイエンスセミナー」では、寺野学長が能美市内の3中学校の2年生を対象に講演を行い、学びの機会を提供しました。



能美市

職場体験学習

能美市では、学校・家庭・地域社会が一体となって、中学生が能美市内の企業や団体で職場体験を行う「職場体験学習」を実施しており、生徒が、自分の将来を見つめながら、集団や社会の中で、主体的に自己を生かそうとする態度や能力の育成に取り組んでいます。

2024年度は、8月に3名を受け入れ、事務局各課および附属図書館において、本学の教育研究を支援する様々な業務を体験しました。



小松市

サイエンスヒルズこまつとの連携

ものづくり・科学体験施設「サイエンスヒルズこまつ」では、青少年の理科離れ解消に向けた取組を実施しています。本学では、毎年「JAISTサイエンス&テクノロジー教室」として、地域の子どもや住民の方を対象に科学教室を開催しており、2024年度は、パソコンの構造について学ぶ企画を行うとともに、同施設内に本学の研究紹介ブースを設置し、研究成果の情報発信を行いました。



経 営

積極的な情報発信

本学の魅力をより多くの方に知っていただくために、さまざまなメディアを通じた情報発信を行っています。研究室紹介の動画やラジオ番組など、本学ならではのユニークな取り組みをご紹介します。

01

JAIST変人ラジオ



越前屋俵太氏をナビゲーターに迎え、本学で研究に取り組む個性豊かな研究者たちの研究内容や人柄に焦点を当てた音声コンテンツ「JAIST変人ラジオ」を制作・配信しています。「変人」とは“時代を変えていく人”を意味しており、研究の最前線に立つ教員の思いや視点を、真面目ながらも軽やかな語り口でお届けするアカデミックなラジオ番組です。2024年8月には、寺野学長をはじめとする12名の教員によるトークを配信し、多様で創造的な本学の魅力を広く発信しました。



02

人気YouTuberの活用



教育系YouTubeチャンネル『予備校のノリで学ぶ「大学の数学・物理」』を運営する人気教育系YouTuber・ヨビノリたくみ氏が2024年9月に本学の複数の研究室を訪問し、その様子を紹介する動画が2024年10月に公開されました。動画は「ヨビノリ」の公式YouTubeチャンネルにて、「研究室を巡っていたら骨格標本と社交ダンスする教授に会いました」というタイトルで配信されており、本学の多様でユニークな研究環境や教員の魅力を、軽快かつ親しみやすいスタイルで紹介しています。



03

「ジャイレオン(JAI-LEON)」



本学公式マスコットキャラクター「ジャイレオン」は、本学の魅力をより幅広い層に伝えることを目的として誕生しました。研究科統合を契機に、高度な専門性を有する教育・研究機関としての側面に加え、親しみやすさやユニークさといった新たな観点から本学をPRするため、職員有志による「JAISTゆるキャラ制作プロジェクト」を立ち上げ、キャラクターの企画・制作が行われました。

2024年度は、学内掲示物や広報グッズ、名刺などに登場するほか、ジャイレオンを大きくデザインしたシャトルバスの運行開始や学位記授与式における記念撮影フォトフレームに用いるなど、本学の広報活動において多方面で活躍しました。



組織体制(ガバナンス)

国立大学法人の経営については、法人の長である学長が意思決定を行う責任と権限を有する一方、国立大学法人法において定められた事項について、学長及び理事で構成する役員会の議を経なければならないとされています。

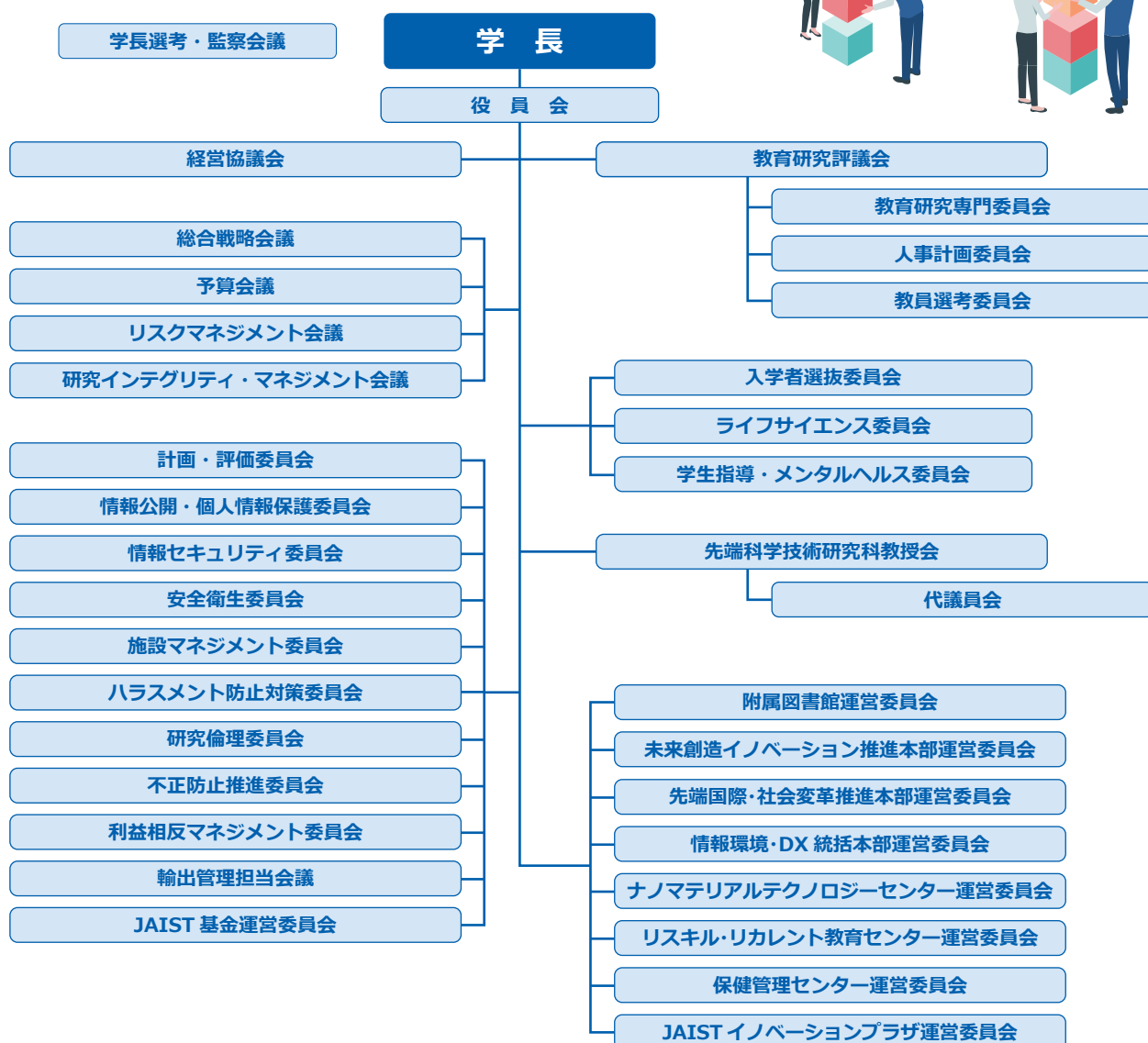
本学においても役員会を置き、理事は学長から命ぜられた職務を行うとともに、役員会の構成員として、中期目標や中期計画に関する事項等について審議に参加し、学長の意思決定を支えています。

役員会同様、経営・教学双方の最終責任者である学長の意思決定を適切に支えるため、国立大学法人の経営に関する重要事項を審議する経営協議会と、国立大学の教育研究に関する重要事項を審議する教育研究評議会を置いていますが、これに加えて、本学の戦略(教育、研究、大学運営等)に関し、企画検討及び意見調整を行うことを目的として、学長、理事(非常勤を除く)、副学長、研究科長、副研究科長、専攻長及び副理事で構成する「総合戦略会議」を月に1回開催し、法人執行部と教学の代表者との意見調整を行っています。

このほか、人事計画委員会、予算会議、入学者選抜委員会等、本学の運営に係る重要な会議については学長が自ら主宰しており、学長の強力なリーダーシップの下、迅速な意思決定を実現できる体制となっています。

また、学長と理事等との意思疎通を十分図ることにより、業務全般に関して迅速かつ的確な意思決定を行うため、学長・理事懇談会を毎週開催しています。

なお、本学における意思決定体制は、次の図のとおりです。



※R7.7.1 現在



解体新書

1774年に江戸時代の医師・杉田玄白らによって翻訳・出版された、我が国最初の本格的な西洋解剖学書。原著は、ドイツ人のヨハン・アダム・クルムスの『人体解剖図表』の蘭訳『ターヘル・アナトミア』であり、本文4巻・附図1巻からなる。

収蔵先：附属図書館 貴重図書室

Finance

財務状況

ここからは、北陸先端科学技術大学院大学の安定的な運営と持続的な発展を支える財務状況について、わかりやすくご説明します。



貸借対照表

資産の部

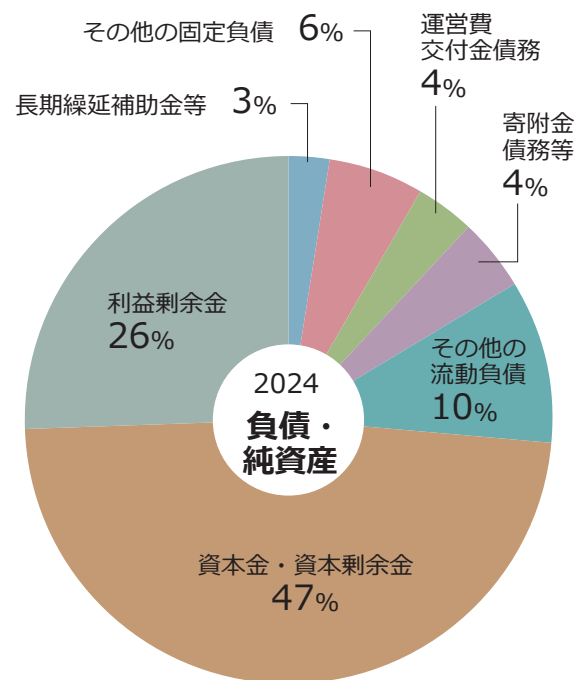
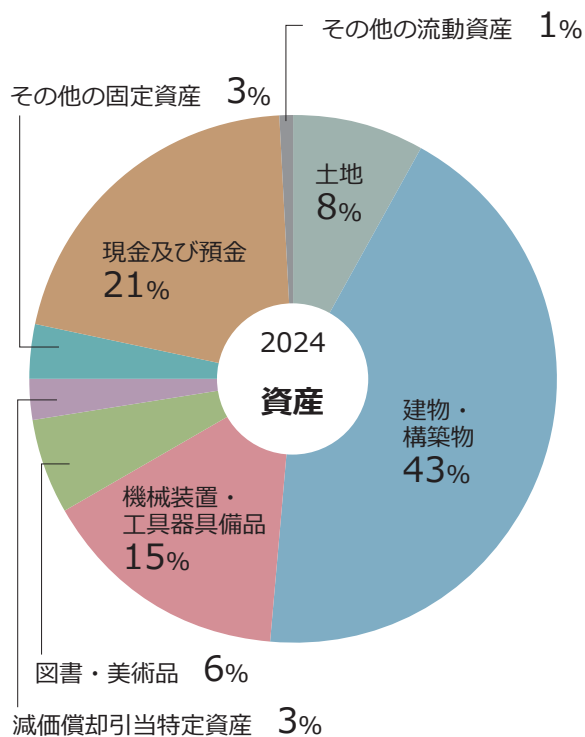
(単位：百万円)

勘定科目	2023年度	2024年度	増減
土地	1,462	1,462	－
建物・構築物	8,120	7,722	△397
機械装置・工具器具備品	2,631	2,755	123
図書・美術品	1,006	1,011	4
減価償却引当特定資産	434	468	34
その他の固定資産	220	567	347
現金及び預金	2,686	3,709	1,023
その他の流動資産	101	145	43
資産合計	16,662	17,842	1,179

負債・純資産の部

(単位：百万円)

勘定科目	2023年度	2024年度	増減
長期繰延補助金等	335	462	127
その他の固定負債	1,202	1,096	△106
運営費交付金債務	57	669	612
寄附金債務等	418	773	354
その他の流動負債	1,629	1,828	198
負債合計	3,644	4,831	1,186
資本金	16,017	16,017	－
資本剰余金	△7,273	△7,662	△389
利益剰余金	4,274	4,656	382
純資産合計	13,018	13,011	△7
負債・純資産合計	16,662	17,842	1,179



2024年度は、2023年度と比較して、資産合計及び負債合計がそれぞれ12億円増加しました。この増加の主な要因は、翌事業年度への運営費交付金や外部資金の繰越額が大幅に増加したことにあります。これに伴い、資産では「現金及び預金」、負債では「運営費交付金債務」や「寄附金債務等」がそれぞれ増加しました。

損益計算書

費用の部

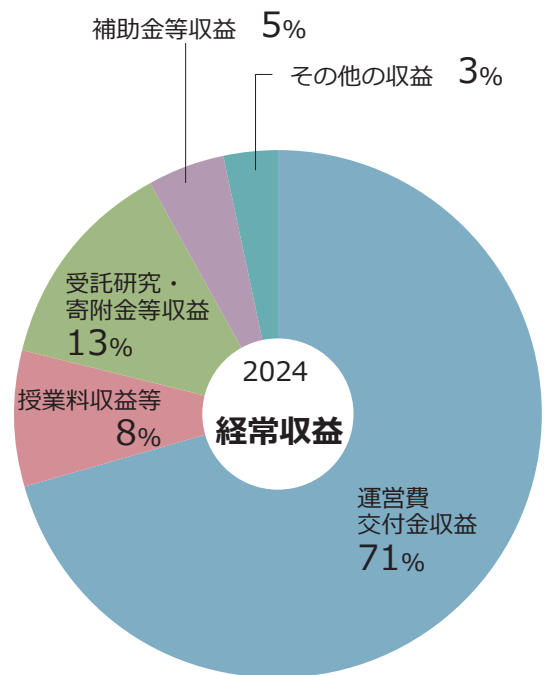
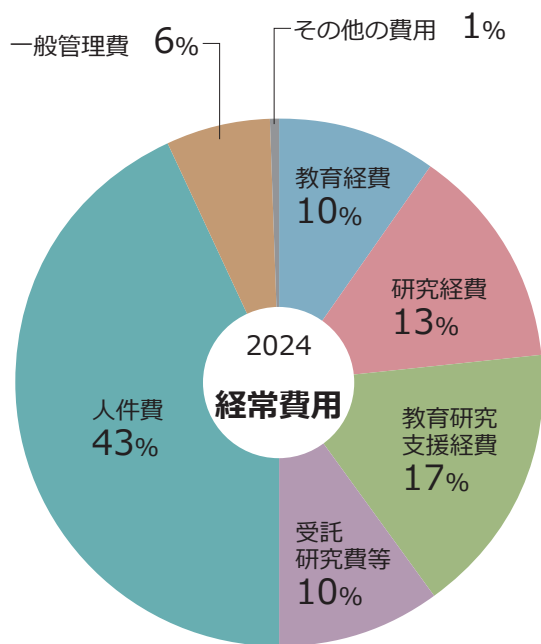
(単位：百万円)

勘定科目	2023年度	2024年度	増減
業務費	6,718	6,906	187
教育経費	796	733	△62
研究経費	936	995	59
教育研究支援経費	1,269	1,242	△27
受託研究費等	596	734	138
人件費	3,120	3,200	79
一般管理費	390	462	72
その他の費用	16	37	21
経常費用合計	7,125	7,406	281
臨時損失	9	43	34
当期総利益	516	437	△78

収益の部

(単位：百万円)

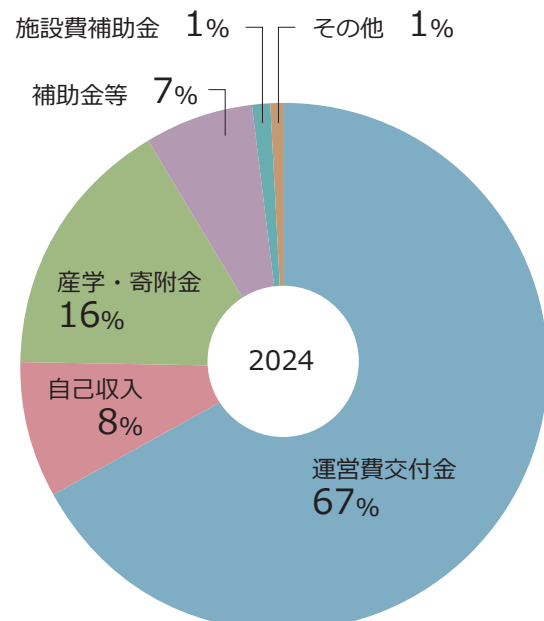
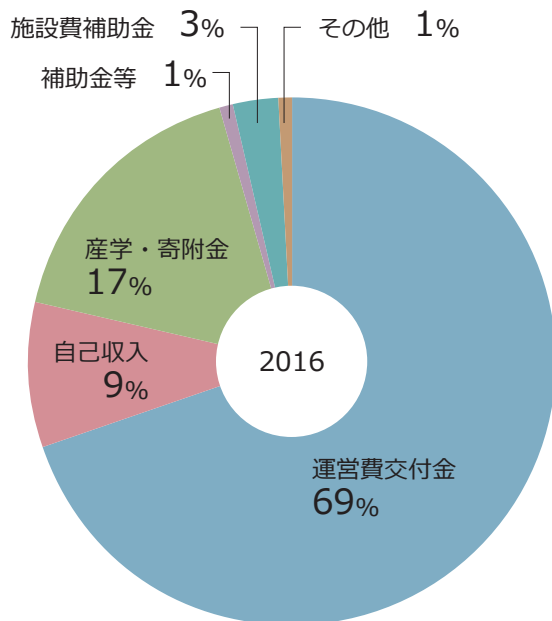
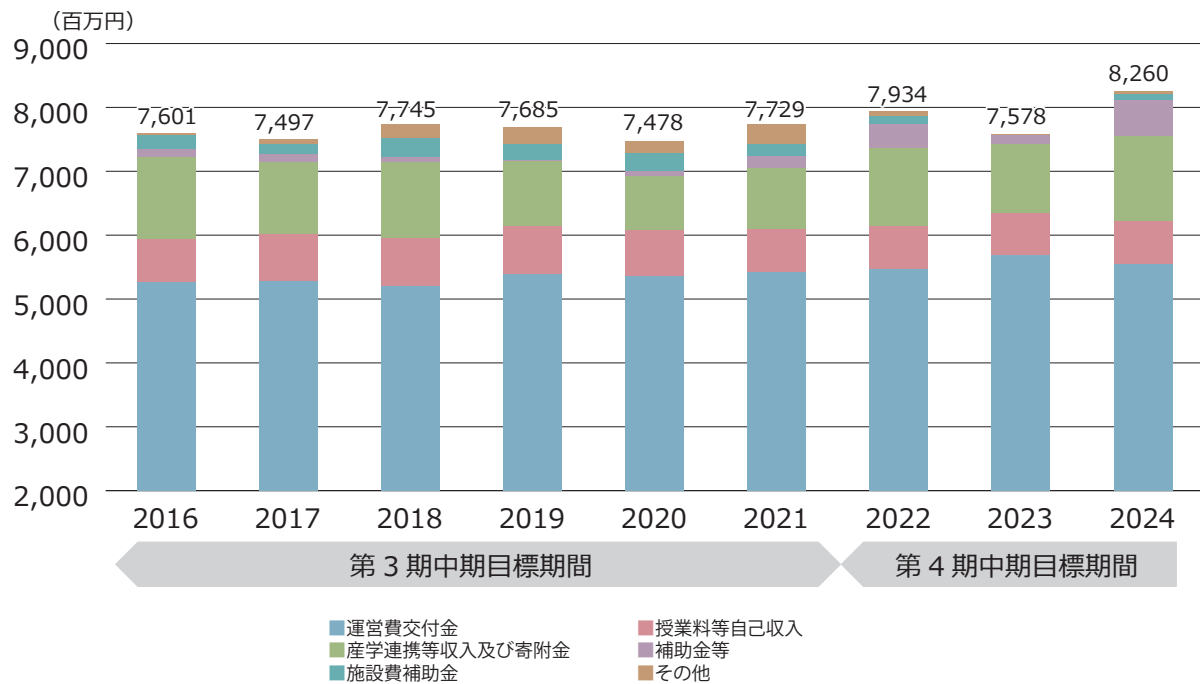
勘定科目	2023年度	2024年度	増減
運営費交付金収益	5,628	5,533	△95
授業料収益等	646	647	0
受託研究・寄附金等収益	937	1,026	88
補助金等収益	200	377	177
その他の収益	228	244	15
経常収益合計	7,642	7,828	186
臨時利益	—	33	33
目的積立金等取崩額	8	26	17



2024年度の経常費用は、2023年度に比べて3億円増加し、経常収益は2億円の増加となりました。いずれも、受託研究費をはじめとする産学連携等収入や補助金等の受入額が増加したことが主な要因です。



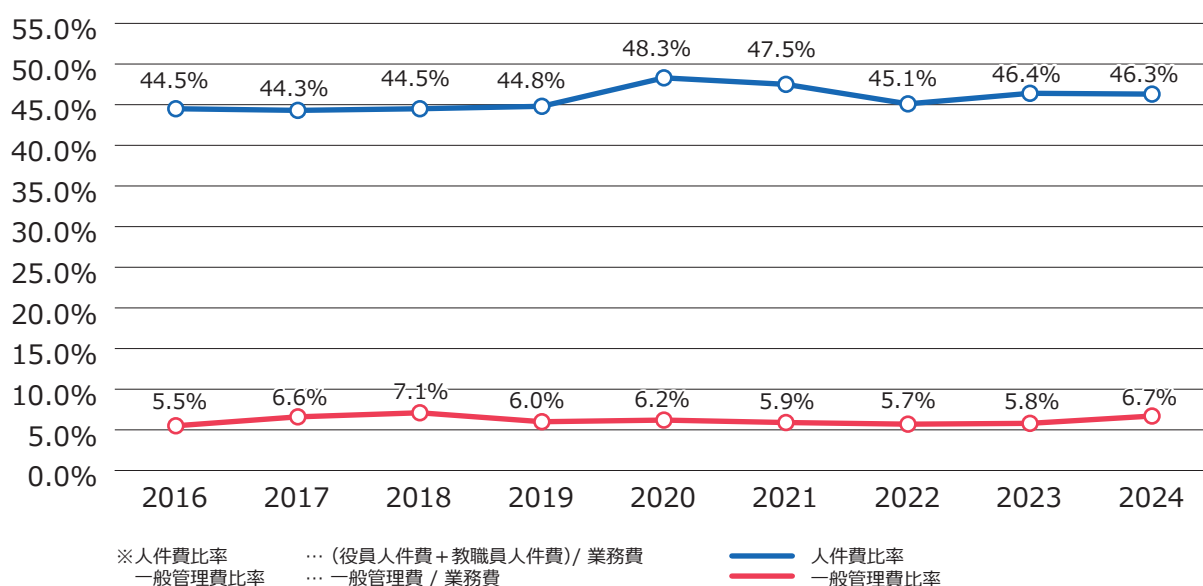
収入額の推移



収入額は、第3期中期目標期間(2016～2021年度)の平均が76億円であったのに対し、第4期(2022～2024年度)の平均は79億円と増加傾向にあります。

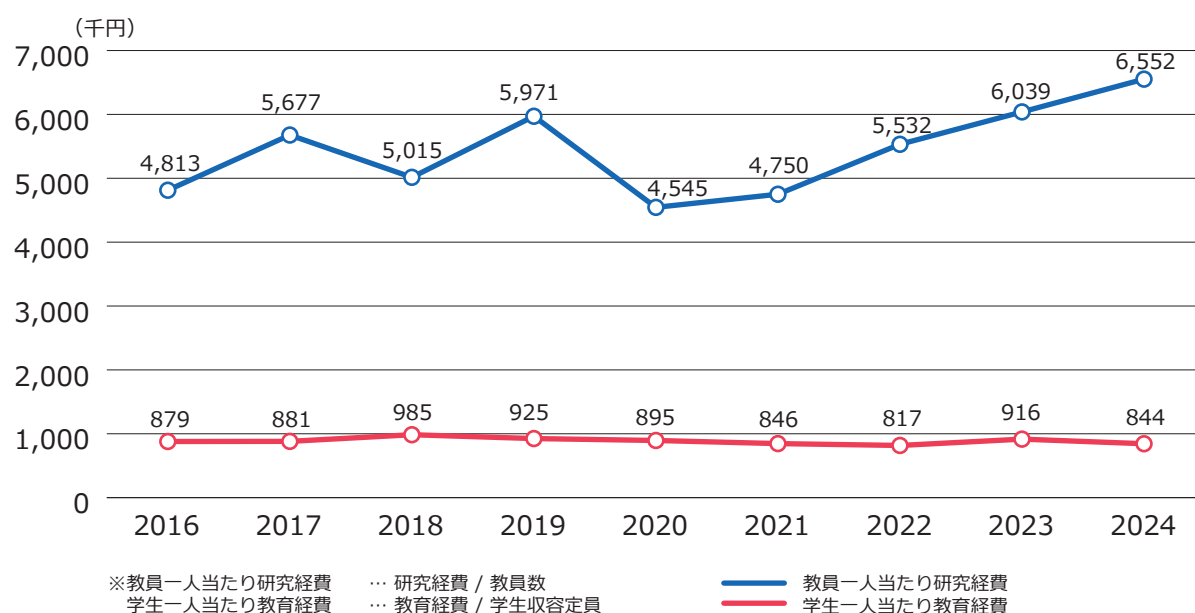
収入額の構成比率は、第3期初年度である2016年度と比較して、2024年度は「産学連携等収入及び寄附金」や「補助金等」の獲得額が伸びていることから、運営費交付金の収入額が増加している一方で、全体に占める比率は下がっています。このことは、自律的・安定的な財務基盤の構築に向けた取組の成果であり、多様な財源の確保により国から交付される運営費交付金への依存度が下がっていることを示しています。

「人件費比率」および「一般管理費比率」の推移



人件費比率および一般管理費比率は、いずれも比率が低いほど業務運営の効率性が高いとされる財務指標です。近年、これらの比率は横ばいで推移していますが、引き続き業務運営のさらなる効率化を実現するため、人件費および一般管理費の節減や、外部資金の獲得等に尽力します。

「教員一人当たり研究経費」および「学生一人当たり教育経費」の推移



本学は第4期中期計画において、世界的な研究大学としての地位確立を目標に掲げ、研究力の強化に不可欠な施策や事業への重点的な予算配分に取り組んでいます。
その成果の一つとして、教員一人当たり研究経費が増加傾向にあり、戦略的な予算配分が着実に実施できているといえます。

JAIST 基金

優れた研究者・技術者の育成と世界水準の研究の推進を支援することを目的に、「JAIST 基金」を設置しています。この基金は、大学や公的機関等の研究者のみならず、産業界において研究開発を担う高度人材の育成も支えるものであり、本学がこれまで積み重ねてきた先進的な教育研究活動をさらに発展させる原動力となるものです。

「JAIST 基金」を通じて得られるご支援をもとに、国際的に競争力のある大学院大学としての基盤を強化し、社会とともに未来を創造する大学としての役割をより一層果たしてまいります。

皆さまからの温かいご支援を心よりお願い申し上げます。

教育研究支援基金

教育研究推進、社会貢献、国際交流等の事業に対する支援を行います。

修学支援基金

経済的理由により修学が困難な学生を支援します。

JAIST 基金への寄附の申し込み方法

インターネット決済（クレジットカード、コンビニ、Pay-easy）や、銀行振込、現金でのご寄附はこちらから承ります。



JAIST 古本募金

Used Book Donations of JAIST

古本募金のご寄附は、「教育研究支援基金」として活用いたします。ご自宅まで宅配業者が集荷に伺います。専用フォームからお申し込みください。



同窓会との連携

修了生との継続的な連携を重視し、同窓会と協力して在学生への就職支援や修了生への情報発信を積極的に行っています。

就職支援における連携

就職支援の一環として、修了生の有志をキャリアメンターとして委嘱し、在学生に対して就職やキャリアに関する助言を行っています。

2024年度はキャリアメンターセミナーを開催し、IT業界の第一線で活躍する株式会社 Scalar ソリューション・アーキテクトの加藤哲裕氏から「Connecting the dots “今” 求められるキャリア戦略とは」と題して講演いただきました。

セミナー後には、在学生との座談会も行われ、学生からは「本当にやりたいことを探すにはどうしたらよいか」「これまでの職業経験で一番成長したと実感したときは」など、次々と質問の手が上がり、加藤氏は体験を踏まえながら、自身の考えを学生に伝えていました。

セミナーには、学年・国籍・分野を問わず様々な学生が参加し、興味ある「Dots」に目を向けて行動することの大切さを学ぶ良い機会となりました。



同窓会総会での大学の近況報告



ベトナムでの同窓会組織設立記念イベント

修了生への情報発信

同窓会主催の同窓会総会は毎年開催されており、本学役員から大学の現状や今後の展望について報告するなど、修了生の理解と関係強化を図る貴重な機会となっています。また、2024年9月には、本学役員および同窓会役員が、ベトナムで開催された同窓会組織設立記念イベントに出席しました。現地では、海外同窓会活動の活性化に向けた意見交換が行われ、海外在住の修了生とのつながりを一層強める機会となりました。さらに、本学では「同窓会システム」を通じて、大学主催イベントの案内やメディア掲載情報など各種情報を随時発信し、修了生との関係構築に努めています。

北陸先端科学技術大学院大学 統合報告書2025
JAIST Integrated Report BEYOND

2025年10月発行

【報告対象期間】

2024年4月～2025年3月

ただし、必要に応じて当該期間の前後についても
記載している箇所があります。

【編集・発行】

北陸先端科学技術大学院大学 広報室

【お問合せ】

北陸先端科学技術大学院大学 広報室広報係

〒923-1292 石川県能美市旭台1-1

TEL : 0761-51-1031

E-mail : kouhou@ml.jaist.ac.jp

<https://www.jaist.ac.jp/index.html>



